
狂犬嬢と羊な執事と雌犬コック

田中田 圭士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂犬嬢と羊な執事と雌犬コック

【Nコード】

N1344D

【作者名】

田中田 圭士

【あらすじ】

引きこもりの執事が、特に意味もなく誘惑とかされるお話。

「うん、いつ食べてもいろいろりちゃんの作る料理はおいしいね。きつといいお嫁さんになれるよ」

「いえこれはベネズエラ様のおかげなんですよ」

八木は、一回り年齢の離れた少女がしばしば口にする、なぞの神様の名前をスルーする能力をいつの間にか身につけていた。

「それはそうと三宅さんがどこにいるか知らないかい。今日こそは、私が夜なべして作り上げたこのメイド服を着てもらわないと」

右腕にハイソなヴィクトリアン調メイド服をたずさえた八木は、汚さないようにと左手でつまみ食いにいそしんでいる。その隙を狙われた。

「八木さん、はいどうぞ」

「え」

箸を持っていたはずの左の手ききてじゃないほうの平はいまや、可憐なコック・いろいろいたの右胸にあてがわれており、少女は潤んだひとみで八木を見上げている。

「つまみ食いするのはお料理だけですか？」

少女は誘惑しているつもりだが、その胸には触って楽しむほどの体積はなく、残念なことに執事・八木にもそういった特殊な性癖はなかった。

そして最大の不幸は今が就業時間内だったことだ。

「職場恋愛を禁ず、と言っておいたはずだが……」

厨房の入り口にはいつのまにか、歩くサイクロン嬢・陽花が仁王立ちとなって、二人の濡れ場に冷ややかな視線を送っていた。

「ぎゃー、お嬢さま！ 違っんです、これは」

「そうなんです、わたしたち真剣なんです！ 許してください」

聞く耳を持つ意思など微塵も持ち合わせていないらしい嬢は、台所用スリッパをはくつつかつかと二人のそばまで歩み寄ってきた。
「ひっさ、っ」

八木の手はまだいりりばたの胸についている。

「SHOW TIME（掌底）！」

嬢の細腕とはいえ、あごにスマッシュヒットした張り手は執事の脳を揺さぶり、哀れな男は一撃で昏倒状態に陥り、水色のタイル床に沈む。

「私は、女は殴らない」

嬢はしかし、ショックでへたり込んでいるいろりばたの細長いコック帽をなぎ払った。

「けれどほはたちゃん、君はクビだ。同級生だったからって、なんにもかも許されるわけじゃない」

思いもよらないときにかけられた厳しい言葉に、いろりばたは放心してしまい、あとはもう床のタイルを見つめているのが精一杯だった。

「八木いつまで寝ている、就業時間は終わったぞ。先生の時間だよ」

嬢は床に落ちたメイド服に気付いた。

「裁縫は得意なようだな」

「げほげほ……、今日は家庭科ですか」

「宿題がある」

「手伝いませんよ。自分の力で……」

「『人脈は力だ』と母親に習わなかったか？ たったそれだけで、この件は水に流してやろうというのだから、寛大な主だろう。笑っ

てよろこべ」

執事は口元を上げたが、目は笑っていない。

「かしこまりましたお嬢さま」

「それと、執事長に新しいコックを探すように言っておけ」

という出来事が一週間前にあったにもかかわらず、その一週間後に嬢の前に現れた新しいコックは、何の因果か再びいろりばただった。

「今日からこちらで働かせていただくことになったいろりばといいます。よろしくおねがいします」

「執事長おおー！」

「お呼びで」

「求ム状況説明」

「おや丹羽ちゃんも一緒」

「これは何の野望だ陰謀だ。まさかそういった特殊な性癖か。あの男ですらかからなかった色仕掛けに、あなたともあるう人が」

執事長は興奮している嬢を制すと、持っていたカップラーメンをテーブルの上に置き理由を話しはじめた。お湯が少しこぼれた。

「とんでもない。この大日九生、陽花嬢様以外の人間の色仕掛けに墜ちることなど無きにしもあらんこともなく、ただただ新しい人材を募集したり、面接したりするのが七面倒くさかったただけですあほらしい」

執事長はズリ落ちた眼鏡を所定の位置に戻しつつ、私を見くびらないでいただきたいと言って説明をしめくくった。

「この子は規則を破ったんだけど」

当然、嬢は納得するはずもなく妙に自信たっぷりの大人に対して、もごもごと反論する。しかし現実には非情であった。

「お嬢様、今日のレッスンです」

執事長は嬢の両肩に手を置くと、空よりも深くすがすがしいその瞳で少女の目を真っすぐ見据えて言い放った。

「きまりは破るためにあるのです」

ぽかんとおおきく口を開けている嬢を残し、一仕事終えた執事長はカップラーメンを持って応接間をあとにした。庭師の丹羽に内蔵された原子時計は、寸分の狂いもなくきっかり三分数えていた。

「そーいうわけなんで、はるちゃんこれからも末永くよろしくね」

「あれいりちゃん、なんでいるの」

まぬけ面を下げた執事がやってきた。手にはカップ焼きそばを持っている。

「あつ八木さん、いいところに。実はあれからこないで結婚してください」

一瞬、場の時間は停止したが嬢の「うそつけ」という発言によって再び回りだした。

「うんウソ。でも結婚してほしいのはホントかな」

「職場恋愛は認めない」

「大丈夫。八木さんのことが好きなわけじゃないから」

執事は少し泣きそうになった。

「だったらなおさらだよ。雇い主としても友達としても、はたちやんのパパとママに申し訳できない」

はじめて聞く嬢のシリアスな言葉に、いろりばたは放心してしまい、あとはもうふかふかのソファに深々と沈みこんでいるのが精一杯だった。

「だ、だいたい『来ない』と言ってもなにが来ないのか分からないし。主語が抜けているんだ。その文は」

今度こそ完全に場は凍りついた。嬢の空気を読んでいない言葉ですら取り繕うことはできず、焼きそばの麺が伸びきろつと、執事もコックも大浴場にあるお湯を吐き出すライオンよりも動かない。

あわてふためく嬢をよそに、庭師の丹羽だけはどのタイミングで「八木、今日の授業は保健体育だぜ！」と言おうかと温めていた。

しかし世の中にはその怜悯なCPUでは演算しきれない出来事が存在するというのもまたまぎれもない事実なのだった。

おしまし

（後書き）

登場人物紹介

・執事：八木 羊 やぎ ひつじ

主人公兼執事兼引きこもり。一人称は私。ビジュアルイメージは『みえるひと』の轟。

・コック：いろりばた（いろり はた）

名前を漢字で書くと少々アレなため、学校でいじめられた末、不登校になった。名字を変えるためだけに早く結婚しようと考えている。「味覚は歳が近いほど似ている」とのことで、嬢が暇な彼女を強引な方法で雇用した。

・メイド：三宅 仮 めいどの みやけさん

本編未登場。訛りが強すぎるため誰も彼女の言葉が理解できず、したがって本名も謎。

・嬢：紫 陽花 むすめ はるか

八木に使う態度はなにかで見た、「引きこもりにはスパルタ」という言葉をもとにしたもの。

・執事長：大日 九生 おおにち くしゅう

カップ焼きそばは焼いてないから嫌い。人としてわりと最低なところがある。

・庭師：丹羽 にわ

美少女が装着している、美少女が未来から操縦している、果ては変形すると可憐な美少女になるなどと八木が断固主張して止まない

庭師ロボット。おそらく、ロボットと呼ぶと自爆するような少女らしい繊細な一面を持つところからそう言っているのだろう、と丹羽は考えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1344d/>

狂犬嬢と羊な執事と雌犬コック

2011年1月21日14時06分発行